

源氏物語

柏木

紫式部

青空文庫

死ぬる日を罪むくいなど言ふきはの涙

に似ざる火のしづくおつ
（晶子）

右衛門督うゑもんのかみの病氣は快方に向くことなしに春が来た。父の大臣と母夫人の悲しむのを見ては、死を願うことは重罪にあたることであると一方では思いながらも、自分は決して惜しい身でもない、子供の時から持つていた人に違つた自尊心も、ある一つ二つの場合^{えんせい}に得た失望感からゆがめられて以来は厭世^{えんせい}的な思想になつて、出家を志していたにもかかわらず、親たちの歎^{なげ}きを顧みると、この絆^{ほどし}が遁世^{とんせい}の実を上げさすまいと考えられて、自己を紛らしな

がら俗世界にいるうちに、ついに生きがたいほどの物思いを同時に二つまで重ねてする身になったことは、だれを恨むべくもない自己のあやまちである、神も仏も冥みようじよ助たを垂たれたまわぬ境界に墮おちたのは、皆前生での悲しい約束事であろう、だれも永久の命を持たない人間なのであるから、少しは惜しまれるうちに死んで、簡単な同情にもせよ、恋しい方に憐あわれだと思われることを自分の恋の最後に報いられたことと見よう、しいて生きていて自己の悪名も立ち、なお自分をもあの方をも苦しめるような道を進んで行くよりは、無礼であるとお憎しみになる院も、死ねばすべてをお許しになるであらうから、やはり死が願わしい、そのほかの点で過去に院の御感情を害したことはなく、長く恩顧を得ていた以前

の御愛情が死によつて蘇よみがえつてくることもあるであらうとこんなふう
に思われることが多い哀れな衛門督であつた。なぜこう短時日
の間に自分をめちやめちやにしてしまったのであらうと煩はんもん悶もんし
て、苦しい涙を流しているのであるが、病苦が少し楽になつたよ
うであると、家族たちが病室を出て行つた間に衛門督は女にょさん三さんの
宮みやへ送る手紙を書いた。

もう私の命の旦たんせき夕せきに迫つておりますことはどこからとなくお
耳にはいつているでしょうが、どんなふうかともお尋ねくださ
いませんことはもつともなことです、私としては悲しゆうご
ざいます。

こんなことを書くのにも衛門督は手が慄ふるえてならぬために、書

きたいことも書きさして先を急いだ。

今はとて燃えん煙も結ばほれ絶えぬ思ひのなほや残らん

哀れであるだけでも言つてください。それに満足します心を、
暗い闇やみの世界へはいります道の光明にもいたしましょう。

と結んだのであつた。

小侍従にもなお懲りずにかみ督は恋の苦痛を訴えて来た。

直接もう一度あなたに逢つてあ言いたいことがある。

とも書いてあつた。小侍従も童女時代からおぼ伯母の縁故で親しい
交情があつたから、だいそれた恋をする点では、迷惑な主人筋の

変わり者であると面倒には思っていたものの、生きる望みのなくなっている様子を知っては悲しくて、泣きながら、

「このお返事だけはどうかenasುತ್ತてくださいまし。これが最後のことでございましょうから」

と宮へ申し上げた。

「私だつてもういつ死ぬかわからないほど命に自信がなくなっているのだから、そうした気の毒な容体でいる人としてだけに同情もされるけれど、私はもう苦しめられることに懲りているのだから、返事などをしてかかりあいになるのは非常にいやに思われる」

こうお言いになって、宮は書こうとあそばさない。自尊心があまりになるのではなくて、これは院のお心に御自身のあそばされ

た過失の影がおりおりさして、悩ましい御様子をお見せになることもあるのを、恐ろしく苦しいことと深く思つておいでになるからである。小侍従はそれでも硯すざりなどを持って来て責めたてるので、しぶしぶお書きになった宮のお手紙を持って、宵よいやみ闇くらに紛れてそつと小侍従は衛門督えもんのかみの所へ行つた。

大臣は大和やまとの葛城山かつらぎから呼んだ上手じょうずな評判のある修験者にこの晩は督かみの加持かじをさせようとしていた。祈祷きとうや読経どきょうの声も騒がしく病室へはいつて来た。人が勧めるままに、世の中へ出ることをしなない高僧などで、世間からもまたあまり知られていないよな人も、遠い土地へ息子むすこたちを派遣などして呼び迎えて衛門督の病気に効験の現われることを期している大臣であるから、見て

感じの悪いような野卑な僧などがあとへあとへとこのごろはたくさん来るのである。病人は何という名の病患でもなくて、ただ心細いふうに時々泣き入っていたりするのを、陰陽師おんようじなども多くは女の霊が憑ついていると占っているので、そうかもしれないと大臣は思い、他へ憑つきものを移そうとしてもなんら物怪もののけの手がかりが得られないのに困り、こうして遠国の修験者などを呼び集めることもするのであった。今度山から来た僧も大男で、恐ろしい目つきをして荒々しく陀羅尼だらにを読んでいるのを、衛門督は、

「ああいやになる。私は罪が深いせいなのか、陀羅尼を大声で読まれると恐ろしくて、ますますそれで死ぬ気がする」

と言いながら病床を出て、小侍従のいる所へ来た。大臣はそん

なことを知らず、病人は寝入っていると女房たちに言わせてあったのでそう信じて、ひそかにこの山の僧と語っていた。大臣は年がいつてもなおはなやかな派手はでな人で、よく笑う性質なのであるが、こうした侮蔑ぶべつするに価あたする山の修験僧と向き合つて、衛門督の病気の当初から、その後なんということなしに重くばかりなつてゆくことなどをこまごまと語っていた。

「どうかあなたの力で物怪が正体を現わして来るようにやってほしいものです」

とも信頼したふうで言っているのも哀れであった。

「小侍従、聞いてごらん。何の罪で私がこうなっているかをご存じないものだから、女の霊が憑ついているなどごまかされておい

でになるが、あの方以外に女として惹くものない私の心へ、あの方の霊が眞実憑いていくれるのなら、いやでならない自分の身もありがたくなるだろうよ。それにしてもだいそれた恋をして、あるまじい過失を引き起こして、人のお名を穢し、自身を顧みないようになる人は自分だけではない、昔の人にもあつた罪なのだとみずから慰めようとするがね、そんなことで私の心は救われないのだよ。相手があの方なのだから、自責の念に堪えられまいではないか。生きていることももうまぶしくてならなくなつたというのは、昔から世の中の人と言うように、一種特別な光の添つた方らしい。大罪人でもないのに、お顔を見合わせた瞬間から私の心は混乱してしまつて、脱け出した魂魄が六条院をさまよつてい

るようなことに気がついた時には君、まじないをしてくれたまえ」
などと、衰弱して殻からのようになった姿で、泣きも笑いもして衛え
門もん督のかみは語るのであった。宮が非常にお恥じになっている御様子、
物思いばかりをしておいでになるといふことも小侍従は告げた。
自身が今 冗じょうだん談だん と言い出したことではあるが、その宮をおいた
わしく、恋しく思う魂魄はそちらへ行くかもしれぬというような
気も衛門督はしていつそう思い乱れた。

「もう宮様のお話はいっさいすまい。不幸で短命な生しょうがい涯がいに続
いて、その執着が残るために未来をまた台なしにすると思うのが
つらい。心苦しいあのことを無事にお済ましになったとだけはせ
めて聞いて死にたい気もするがね、私たちを繋つなぎ合わせた目に見

えぬものを私が夢で見た話なども申し上げることができないままになるのが苦痛だよ」

と言つて深く督かみの悲しむ様子を見ては、小侍従も堪えきれずなつて泣きだすと、その人もまた泣く。蠟燭ろうそくをともしせてお返事を読むのであつたが、それは今も弱々しいはかない筆の跡で、美しくは書かれてあつた。

御病気を心苦しく聞いていながらも、私からお尋ねなどのできないことは推察ができるでしょう。「残るだろう」とお言いになりますか、

立ち添ひて消えやしなましうきことを思ひ乱るる煙くらべに

私はもう長く生きてはいないでしょう。

内容はこんなのであつた。衛門督は宮のお手紙を非常にありがたく思った。

「このお言葉だけがこの世にいるうちのもつともうれしいことになるだろう。はかない私だね」

いっそう強く督は泣き入つて、またこちらからのお返事を、横になりながら休み休み書いた。鳥の足跡のような字ができる。

「行くへなき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ち離れじ

とりわけ夕方には空をおながめください。人目をおはばかりになりませんことも、対象が実在のものでなくなるのですからいいわけでしょう。そうしてせめて永久に私をお忘れにならぬようにしてください」

などと乱れ書きにした。病苦に堪えられなくなつて、

「ではもういいから、あまりふけないうちに帰つて行つて、宮様に、こんなふうには死が迫つているといふことを申し上げてください。どうした前生の因縁からこんなに道にはずれた思いが心に染みついた私だろう」

泣く泣く病床へ衛門督は膝いざ入り入るのであつた。平生はいつまでもいつまでも小侍従を前に置いて、宮のお噂うわさを一つでも多く話

させたいようにする人であるのに、今日は言葉も少ないではないかと思ふのも物哀れで、小侍従は出て行けない気がした。容体をおぼ伯母の乳母めのとも話して大泣きに泣いていた。大臣などの心痛は非常なもので、

「昨日今日少しよかったようだったのに、どうしてこんなにまた弱つたのだろうか」

と騒いでいた。

「そんなに御心配をなさることはありません。どうせもう私は死ぬのですから」

と衛門督えもんのかみは父に言つて、自身もまた泣いていた。

女三の宮はこの日の夕方ごろから御異常きざしの兆が見え出して悩ん

でおいでになるので、経験のある人たちがそれと気づき、騒ぎ出して院へ御報告をしたので、院は驚いてこちらの御殿へおいでになった。お心のうちではなんら不純なことがなくて、こうしたことにあうのであったら、珍しくてうれしいであろうと思召されるのであったが、人にはそれを気どらすまいと思召すので、修験の僧などを急に迎えることを命じたりしておいでになった。修法のほうはずっと前から続いて行なわれているので、きとう祈祷の効験をよく現わすものばかりを今度はお集めになって加持をさせておいでになった。一晩じゅうお苦しみになって日の昇るころにお産があった。男君であるということをお聞きになって、また院は隠れた秘密を容貌ようぼうの似た点などでだれの目にも映りやすい男である

ことが、苦しい、女はよく紛らすこともできるし、多くの人が顔を見るのでないからいいのであるがとお思ひになつた。しかし素姓の紛らわしいことは男の身にあつてもよいが、どんな高貴な方の母になるかもしれぬ女性は生まれが確かでなければならぬ点から言えば、これがかえつてよいかもしれぬとまたお思ひ返しになつた。忘れることもない自分の罪のこれが報いであろう、この世でこうした思ひがけぬ罰にあつておけば、後世ごせで受ける咎とがは少し軽くなるかもしれぬなどとお考えになつた。

宮の秘密はだれ一人知らぬことであつたから、尊貴な内親王を母にして最後にお設けになつた若君を、院はどんなにお愛いたしになるだろうという想像をして、家司けいしたちは大がかりな仕度したくを御出産

祝いにした。六条院の各夫人から産室への見舞い品、祝品はさまざまに意匠の凝らされたものであつた。折敷、衝重、高杯などの作らせようにも皆それぞれの個性が見えた。五日の夜にはちゆうぐう
 中宮のお産養があつた。母宮のお召し料をはじめとして、それぞれの階級の女房たちへ分配される物までも、お后のあそばすことらしく派手にそろえておつかわしになつたのである。産婦の宮への御粥、五十組の弁当、参会した諸官吏への饗応の酒肴、六条院に奉仕する人々、院の庁の役人、その他にまでも差等のあるお料理を交付された。院の殿上人とともに中宮職の諸員は大夫をはじめ皆参つていた。七日の夜には宮中からのお産養があつた。これも朝廷のお催しで重々しく行なわれたのである。太

政大臣などはこの祝賀に喜んで奔走するはずの人であつたが、息の大病のためにほかのことを思う間もないふうで、ただ普通に祝品を贈つて来ただけであつた。宮がたや高官の参賀も多かつた。

院内にもこの若君を珍重する空氣が濃厚に作られていながら、院のお心にだけは羞しゆう恥うちをお感じになるようなところがあつて、宴席をはなやかにすることなどはお望みになれないで、音樂の遊あそびなどは何もなかつた。女三の宮は弱よいお身体からだで恐ろしい大役の出産をあそばしたあとであつたから、まだ米湯おもゆなどさえお取りになることができなかつた。御自身の薄命であることをこの際にもまた深く思われになつて、この衰弱の中で死んでしまいたいとお思ひになるのであつた。院は人から不審を起こさせないこと

を期して、上手じょうずに表面は繕つくろっておいでのになるが、生まれたばかりの若君を特に見ようともなされないのを、老いた女房などは、「御愛情が薄いではありませんか。久しぶりにお持ちになった若様が、こんなにまできれいでいらっしやるのに」

などと言っているのを、宮は片耳におはさみになって、この薄いと言われておいでのになる愛情は、成長するにつれてますます薄くなるであろうと、院がお恨めしく、過去の御自身も恨めしくて、尼になろうというお心が起こった。夜などもこちらの御殿で院はお寝やすみにならずに、昼の間に時々お顔をお見せになるだけであった。

「人生の無常をいろんな形で見ていて、もう自分は未来が短くな

つているのだからと思うと心細くて、仏勤めばかりをする癖がついて、産屋うぶやの騒がしい空気と自分とはしっくり合わない気がされたたびたびは来ないのですが、気分はどうですか。少しさっぱりしたように思えますか。気の毒ですわね」

と、お言いになりながら院は几帳きちようの上から宮をおのぞきになった。宮は頭かしらを少しお上げになつて、

「まだ私には快くなる自信ができません。でね、こんな際に死んでは罪が深いと聞いておりますから、尼になりました、その功德であるいは生きることができるかどうかためたくもありませんし、また死にましても罪が軽くなるでしょうからと思われまして、そういういたしたくなりました」

平生にも似ずおとなびてお言いになった。

「とんでもないことですよ。なぜそうまで悲観するのですか、産をするにだれも皆そんなふう恐ろしく不安になるものですが、子を産んだ人が皆死ぬものではありませんからね。気を静めるようになさい。そんなことは言わずに」

と院はお言いになった。お心の中ではその希望が自発的に起こったのなら、そうさせてしまったほうが自分の心が楽になって、深く今後もこの人を愛することが可能かもしれぬ、今までと同じように取り扱っていても、同じにならぬものが自分の心にあつてはおかしいそうである、自分ながらも以前の愛情がこのまままた帰って来ようとは思われぬ、自分はどんなに努めても暗い霧が

心を横切ることは免れまい、自然宮への愛が薄くなつたように他人が思うことも予想され、その時の宮のお立場も苦しかりうと思われる。法皇がお聞きになつても自分が悪いことにはかりなるであらう、病氣に託してそうおさせしようかとお思われになるのであつたが、またそれを実現させるのが惜しくも哀れにもお思われになり、若盛りの姿を尼に変えさせるのも残酷に思おぼしめ召されて、「ぜひと強く生きようとお努めなさい。この上そうまで悪くなるわけはありませんよ。もうだめかと思われていた人さえ癒なほつてきた例が近い所にあるのですから、それを思うとまだこの世は頼みになりますよ」

などとお言いになつて、白湯さゆを勧めたりして院はおいでになる

のであった。宮のお顔色は非常に青くて力もないふうに寝ておいでになるが、たよりない美しさをなしているのを御覧になつては、どんな過失があつても自分のうちの愛の力が勝つて許しうるに違いないのはこの人であると院は思召した。

御寺みでらの院は、珍しい出産によさんを女三みやの宮が無事にお済ませになつたと、という報をお聞きになつて、非常にお逢あいになりたく思召したところへ、続いて御容体のよろしくないたよりばかりがあるために、専心に仏勤めもおできにならなくなつた。衰弱しきつた方がまた幾日も物を召し上がらないでおいでになつたのであるから、いつそう頼み少なくてお見えになる宮が、

「長いことお目にかかれずに暮らしておりましたころよりも、も

つともつと私はお父様が恋しくてなりませぬのに、もうお目にかかれぬまま死んでしまうのでしうか」

と言つて、非常にお泣きになつたので、六条院はそのことを人から法皇にお伝えさせになると、法皇は堪えがたく悲しく思召して、よろしくない行動であるとは思召しながら、人目をはばかつて夜になつてから六条院へにわかには御幸あそばされた。御主人の院はお驚きになつて、きようく恐懼の意を表しておいになつた。

「もうこの世のことは顧みますまいと決心していたのですが、こゝうなつてもまだ迷うのは子を思う道の闇やみだけで宮が重態だと聞くと私のお勤めも怠るばかりで恥ずかしくてなりませんが、だれが先とも後あととも定まらない人の命であれば、逢いたがる子に逢つて

やらずに死なせましたら、親の心残りが道の妨げになる気がする
ので、人間世界の譏りそしも無視して出て来たのです」

法皇はこう仰せられた。御僧形ではあるが艶えんなところがなお残
つてなつかしいお姿にたいそうな御法服などは召さずに墨染め衣
の簡単なのを御身にお着けあそばされたのがことに感じよくお美
しいのを、院はうらやましく拝見されて、例のようにまず落涙を
あそばされた。

「御容体は何という名のある病気ではないのでございますが、今
まで衰弱がはなはだしゆうございましたところへ、お食慾のない
ことが重態に導いたのでございます」

などと六条院はお話しになって、

「失礼な場所でございますが」

と、宮のお寝やすみになつた帳台の前へお敷き物の座を作つて法皇を御案内された。宮を女房たちがいろいろとお引き繕きいて御介抱をしながら、宮をもお床の下へお降ろしした。法皇は間の几きちよ帳うを少し横へお押しになつて、

「夜居の加持かじの僧のような気はしても、まだ効験を現わすだけの修行ができていないから恥ずかしいが、逢いたがつておいでになつた顔をそこでよく見るがいい」

と法皇は仰せられて目をおふきになつた。宮も弱々しくお泣きになつて、

「私の命はもう助かるとは思えないのでございますから、おいで

くださいましたこの機会に私を厄にあそばしてくださいませ」

こうお言いになるのであつた。

「その志は結構だが、命は予測することを許されないものだから、あなたのような若い人は今後長く生きているうちに、迷いが起つて、世間の人にそし譏られるようなことにならぬとは限らない。慎重に考えてからのことにしては」

などと法皇はお言いになつて、六条院に、

「こう進んで言いますが、すでに危篤な場合とすれば、しばらくもその志を実現させることによつてみようじよ仏の冥助を得させたいと私は思う」

と仰せられた。

「この間からそのことをよくお話しになるのですが、物怪もののけが人の心をたぶらかして、そんなふうのことを勧めるのでしようと申して私は御同意をしないのでございます」

「物怪の勧めでそれを行なうと言っても、悪いことはとめなければなりません、衰弱してしまつた人が最後の希望として言つてゐることを無視しては、後悔することがあるかもしれぬと私は思う」

法皇の仰せはこうであつた。お心のうちでは限りもない信頼をもつて託しておいた内親王を妻にしてからのこの院の愛情に飽き足らぬところのあるのを何かの場合によく自分は聞いていたが、恨みを自分から言い出すこともできぬ問題であつて、しかも世間

に取り沙汰されるのも忍ばねばならぬことを始終残念に思っているのであるから、この機会に決断して尼にさせてしまおうとしても、良人おっとに捨てられたのだと、世間から嘲罵ちやうばされるわけのものではない。少しも遠慮はいらぬ。現在において宮の望みは遂げさせなくてはならない、夫婦関係の解消したのちに、単に兄の子として保護してくれる好意はあるはずであるから、せめてそれだけを自分から寄託された最後の義務に負ってもらうことにして反抗的にここを出て行くふうでなくして、自分からかつて宮に分配した財産のうちを広くてりっぱな邸宅もあるのであるから、そこを修繕して住ませよう、自分がまだ生きておられるうちにそれらの処置を皆しておくことにしたい。この院も妻としては冷ややかに見て

も、今からの宮を不人情に放つてはおくまい。自分はその態度を見きわめておく必要があると思召して、

「では私がこちらへ来たついでにあなたの授戒を實行させることにして、それを私は御みほとけ仏から義務の一つを果たしたと見ていただくことにする」

と仰せられた。六条院は遺憾にお思ひになつた宮の御過失のこともお忘れになつて、なんとなることかと心をお騒がせになつて、悲しみにお堪えにならずに、几帳の中へおはいりになつて、

「なぜそういうことをなさろうというのですか。もう長くも生きていない老いた良人をおおっと捨てになつて、尼になどなる気になぜおなりになつたのですか。もうしばらく気を静めて、湯をお飲みに

なったり、物を召し上がったたりすることに努力なさい。出家をすることは尊いことでも、身体からだが弱ければ仏勤めもよくできないではありませんか。ともかくも病気の回復をお計りになった上でのことになさい」

とお話しになるのであるが、宮は頭かしらをお振りになって、おとめになるのを恨めしくお思いになるふうであつた。何もお言いにはならなかつたが、自分を恨めしくお思いになつたこともあるのではないかとお氣がつくと、かわいそうでならない氣があそばされたのであつた。いろいろと宮の御意志を翻ひるがえさせようと院が言葉を尽くしておいでになるうちに夜明け方になつた。御寺みでらへお帰りになるのが明るくなってからでは見苦しいと法皇はお急ぎになつ

て、^{きとう}祈祷のために侍している僧の中から尊敬してよい人格者ばかりをお選びになり、^{うぶや}産室へお呼びになつて、宮のお髪を^{ぐし}切ることをお命じになつた。若い盛りの美しいお髪を^{ぐし}切つて仏の戒^{かい}をお受けになる光景は悲しいものであつた。残念に思召して六条院は非常にお泣きになつた。また法皇におかせられては、御子の中でもとりわけお大事に思召された内親王で、だれよりも幸福な^{しょうが}生^{せい}涯^いを得させたいと思ひあそばされた方を、未来の世は別としてこの世でははかない姿にお変えさせになつたことで^{しお}萎^しれておいでになつて、

「たとえこうおなりになつても、健康が回復すればそれを幸福にお思ひになつて、できれば^{ねんず}念誦^だだけでもよくお唱えしているよう

になさい」

とお言いになった院は、まだ暗いうちに六条院をお去りになることにあそばされた。

宮は今もなおお命がおぼつかない御様子で、はかばかしく御父法皇を目送あそばすこともおできにならず、ものもお言われにならなかった。

「夢を見ておりますようなことが起こりまして、心が混乱しております。昔の御厚情をまたお見せくださいました御幸みゆきに感謝の意もまだ表してお目にかけることができませぬような不都合さも、また私が伺つてお詫わびすることにいたしましたしように」

と六条院は御挨拶あいさつをあそばされた。そしてこの院の役人たち

を御寺へお見送りにお出しになるのであった。

「もう今日か明日かに終わるように自分の命の危険さが思われた際に、あとに残して保護者もなく寂しくこの世を渡らせることが憐あわれまれてならぬ時に、御本意ではなかったでしょうが、あなたへお託しさせていただきます、今までは安心していたのですが、万一かれの命の助かることがありますれば、もう普通の人ではなくなりました者が、人出入りの多い宮殿にいますことは似合わしく思われませんし、郊外の寂しい所へ住ませるのもさすがにまた心細く思うことでしょうか、その点をあなたがお考えくださつて住居すまいを移させることにしていただきたい。どうか今後もかれを念頭にお置きください」

と法皇がお言いになると、

「そんな仰せまでも受けましてはかえって私が恥じ入ります。自分の精神がよく統一されていくのを待ちましてすべてのことに善処いたしましょう」

院は實際悲しみに堪えぬ御様子であった。後夜ごやの加持の時に物もの怪のけが人に憑うつつて来て、

「どう、こんなことになってしまったではないか。上手じょうずに一人を取り返したと思っておいでになる様子がくやしかったから、それからは気のつかぬようにしてこちらへ私は来ていたのだ。もう帰りますよ」

と笑った。これによれば紫夫人を悩ました物怪が、それ以来こ

ちらへ憑いていたのであつたか、あらゆる不祥事はかれがなさしめたのかもしれないぬとお気づきになつた時、女三の宮がおかわいそうでならぬ氣のされる院でおありになつた。宮の御容体は少し持ち直したようであつたが、まだ危険状態を脱したとはお見えにならないのである。女房たちも御出家をあそばしたことで失望した様子であつたが、たとえこうおなりになつても御健康さえ取りもどすことができればと、今はそれを院もお念じになつて、修法もまた延ばさせて、油断なく祈らせることもあそばしたし、そのほかのあらゆる方法もおとりになつて、宮のお命の助かるようにとばかり苦心あそばされるのであつた。

右衛門督うえもんのかみは六条院の宮の御出産から出家と続いての出来事を

病床に聞いて、いつそう頼み少ない容体になつてしまつた。夫人の女二によにの宮みやをおかわいそうにばかり思われる衛門督は、助からぬ命にきまつた今になつて、ここへ宮がおいでになることは軽々しく世間が見ることであらうし、父母が始終近くへ来てゐる病室では、自然お姿をそれらの近親者に見られておしまいになる隙すきができることになつてはもつたないと思つて、

「どんな無理をしてでも一条の宮へもう一度行つてみたいのです」と言い続けるのであるが、両親は許さなかつた。衛門督はだれにも自分の死後はこの宮を御保護申すようにということを頼んでいた。もともと宮の母君の御息所みやすどころはこの結婚に不賛成であつたのが、衛門督の父の大臣の熱心な懇望が法皇を動かしたてまつつ

て、お許しになることになつたものであつて、六条院の二品にほんみやの宮の御幸福のかんばしくない噂うわさなどがお耳にはいつたころには、

「かえつて二の宮のほうが将来の頼おともしい良人を得たというものだ」

と法皇が仰せられると聞いたこともあつたのに、なんという成り行きになることかと今は悲しむばかりであつた。

「こんなふうで宮様を未亡人にしてしまうのかと思ひますと堪えられませんか。あちらにもこちらにもお気の毒なことばかりですが、自分の心に任せないのが命ですからしかたもありません。宮様の今後の寂しい生活を思いますと心苦しくてなりませんから、お母様は親切にしてあげてください。始終お世話をしてあげてください

いお母様」

と督は母夫人にも言っていた。

「縁起の悪い話をしますね。あなたに死なれたあとで、お母様はどれだけ生きておられると思つてそんな未来のことまでも言うのですか」

と言つて、母はまず泣き入つてしまうので、衛門督はよく話すこともできないのである。すぐ下の弟である左大弁に兄はくわしく宮の御事は遺言しておいた。善良な性質の人であつたから、弟たちにも皆親しまれていて、末のほうの弟などは親のように頼みにしているこの人が、遺言をしたりするようになったのを、だれも心細がらぬ者はなくて、家の使用人なども皆悲しんでいるので

ある。朝廷でも非常にお惜しみになつて、いよいよ危篤というところが天聴に達すると、にわかには権大納言に昇任おさせになつた。この感激によつて元氣が出てもう一度だけは参内をするかと帝はみかど期しておいでになつたのであるが、それをすることがもう衛門督にはできなかつた。ただ病苦の中で拝任の表だけを草して奉つた。大臣はこの朝恩の厚さを見てもさらに惜しく悲しくわが子が思われるのであつた。左大将は常に親友の病をいたんで見舞いを書き送つていたのであるが、昇任の祝いを述べに真まっさき先に大臣家を訪問したのもこの人であつた。衛門督の住んでいるほうの対の門内には馬や車がたくさん来ていて、忙せわしそうに人々が入り出していた。今年にはいつてからは起き上がることもあまりできない衛門

督であつたから、大官の親友を病室に招くことが遠慮されて恋しく思いながら逢えないことを思うと残念で、督は、かみ

「失礼ですがやはりここへ来ていただくことにします。この場合のことでやむをえないとお許しくださるでしょう」

と挨拶あいさつをさせて、病室の床の近くに侍している僧などをしばらく外のほうへ出して大将を迎えた。少年時代から隔てなく交際して来た間柄であつたから、近く迫つた死別の悲しみは大将にとつて親兄弟の思いに劣らないのである。今日だけは昇任しょうごの悦びで気分もよくなつていゝであろうとこの人は想像していたのであるが、期待はずれてしまつた。

「どうしてこんなにもまた悪くおなりになつたのでしょうか。今日だ

けはめでたいのですから少し気分でもよくなっておられるかと思つて来ましたよ」

と言つて、病床に添えた几帳きちようの端を上げて中を見ると、

「全然私のようにでなくなつてしまいましたよ」

と言いながら、衛門督は烏帽子えぼしだけを身体からだの下へかつて、少し

起き上がろうとしたが、苦しうであつた。柔らかい白の着物を幾枚も重ねて、夜着を上うへに掛けているのである。病床の置かれた室は清潔に整理がされてあつて感じがよい。こんな場合にも規律の正しい病人の性格がうかがえるようであつた。病人というものは髪ひげや髭ひげも乱れるにまかせて気味の悪い所もできてくるものであるが、この人の痩やせ細ほそつた姿はいよいよ品のよい気がされて、枕まくら

から少し顔を上げてものを言う時には息も今絶えそうに見えるのが非常に哀れであった。

「御病気の長かったことから言えば、特別ひどく病人らしいお顔になったとも言えませんよ。平生よりも美男に見えますよ」

こんなことを口では言いながらも大将は涙をぬぐっていた。

「同じ時に死のうなどと約束もしたではありませんか。悲しいことですよ。あなたの症状は何がどうして悪くなったのだということも言ってくれる者がありませんから、親しい私でさえ何の御病気だか知らないのがたよりないことですよ」

「自分ではいつ悪くなって行くかわからずに来ましたよ。どこか苦しいときまった患部もないものですから、病がこうまで早く進

行するとも思わないうちに重態になってしまったのですから、私はもう今では何が何やら知覚もなくなっている気がしています。惜しくもない私の命が祈りとか、願とかの力でさすがに引きとめられていることは苦痛なものですから、自身から早くなるのを望むようにもなつて変なものですよ。私とすればこの世から去つてしまふことで、いろいろな堪えがたい気持ちのすることもそれは少なくありません。親への孝行も中途までしかしてありませんし、私自身のためにも遺憾なことはありますが、そうしたいっさいのことよりも大事な煩悶はんもんを私はいだいているのです。この命の末になつてほかへ洩もらす必要はないとも思いますが、やはり自分一人だけで思っているには堪えられないのもあるのです。身内の

者はあつても、その人たちに言い出す勇気を私は持っていません。それであなたにだけ言わせていただきますが、私が六条院様の感情をそこねているらしいことがありましてね、それを苦しんで心の中でお詫^わびをして暮らすうちに病氣のようになってしまったのですが、お招きがありました、あの法皇様の賀宴の試楽の日に伺いました時に、お目にかかったのですが、なお許していただけない御感情のあるのをお顔で私は知って、それからの私はもう生きていくことがはばかりのあることのように思われ出して、憂鬱^{ゆううつ}な気持ちで暮らして来たのですが、その際に受けた衝動が強かったために、起^たちがたい衰弱に自分で自分を導いてしまったのですよ。自身の無能なことは承知しながらも少年時代から深く御信頼

して、誠心誠意この方のためにお尽くししようと思ひ決めていた私ですが、中傷した者でもあつたらうかと、死んで残るこの問題への関心はむろん後世ごせの往生の妨げになるだらうと思つていますが、何かの機会にこの話をあなたは覚えていてくださつて六条院へ弁明の労を取つてください。死にましてからでもこのお取りなしがいただければ私はあなたに感謝します」

新大納言はこう語るうちにも病苦の堪えがたいもののある様子も見えて、大将は悲しんだのであるが、その話について思いあたる事が、この人にあつても、不確かな断定はそれでできない気がした。

「あなた自身の誤解ではないのですか、少しもそんな御様子を私

は見受けませんよ。あなたの御病気の重くなったことで御心配をしておられて、いつも遺憾がっついておいでになりますよ。そんな煩んもん悶もんをあなたがしておいでのなるのなら、なぜ今までに私へ言うてくださらなかつたのでしょうか。私が及ばずながら双方の誤解を解いてあげるのです。もう間に合いませんね」

取り返したいように大将は残念がった。

「そうですよ。少し快よい時もあつたのですから、そんな時に御相談をすればよかつたのです。自分自身でわからないのが命にもせよ、まさかこんなに早く終わろうとは思わなかつたというのものはかないわけですね。このことは絶対にだれへもお話しにならないでください。よい機会に私のために御好意のある弁解をしていた

だきたいと思ってお話ししただけです。一条にいらっしやる宮様には何かの時に御好意を寄せてあげてください。お聞きになつて法皇様が御心配をあそばさないように、御生活の上のことも気をつけてあげてください」

などとも大納言は言った。もつと言いたいことは多かつたであろうが、我慢のならぬほど苦しくなつた衛門督えもんのかみは、もう帰れと手を振って見せた。加持かじをする僧などが近くへ来て、母の夫人や大臣も出てくるふうで、騒さわがしくなつたので大将は泣く泣く辞し去つた。同胞である院の女御にょごはもとより、妹の一人である大将夫人も衛門督のことを非常になげ歎いていた。だれのためにもよき兄であらうとする善良な性格であつたから、右大臣夫人などもこの人

とだけは今まで非常に親しんでいて、今度も玉鬘たまかざらは心配のあまり自身の手でも祈祷きとうをさせていたが、そうしたこととも不死の薬ではなかつたから効果は見えなかつた。夫人の宮にもしまいにお逢いできないまままで、泡あわが消えたように衛門督は死んでしまった。今まで愛情の点では批議すべき点もあつたが、形式的にはよく御待遇をして、あくまで御降嫁を得た夫人として敬意を失わない優しい良人おととであつたのであるから、恨めしい思いを格別宮は抱いておいでにならなかつた。こんな短命で終わる人であつたから何にも興味が持てない寂しいふうを見せたのであつたかと追想あそばされるのが悲しかった。御息所みやすどころも早く不幸な未亡人に宮のおなりになつたことを悲しんでいた。衛門督の死で大臣と夫人はまし

て言いようもない、悲歎ひたんに沈んでいた。自分が先に死ぬのが当然なことであるのに、あまりにも道理にはずれた死であると泣きこがれているが、それが何のかいのあることとも見えなかった。女によよさんさんみみややええもんもんののかかみみ

三の宮は衛門督の恋を苦しくばかりお思いになって、長く生きていようとお望みにならなかつたのであるが、死の報をお得になつてはさすがに物哀れなお気持ちになつた。若君を自身の子のように衛門督は思っていたが、衛門督の死におあいになつてみると、神秘的なかわりもある気があそばされて、衛門督が信じていたことがほんとうであつたかもしれぬとお思われになり、いよいよ御自身の運命の悲しさにお泣きになるのであつた。

三月になると空もうらかな日が続き、六条院の若君の五十日いか

の祝い日も来た。色が白くて、美しいかわいい子でもう声を出して笑ったりするのであった。院がおいでになって、

「もうさっぱりした気分になりましたか。でも御かいふく恢復ふくになったかいもありませんね。今までのあなたでこうして快よくおなりになったのを見ることができたらどんなにうれしいだろう。あなたは冷酷に私を捨てておしまいになりましたね」

と涙ぐんで恨みをおいになった。毎日こちらの御殿へおいでにならぬ日はなくなつて、こうした今になって最上のお扱いをあそばされるのであった。五十日の儀式に母君が尼姿でおいでになるのは、若君の将来を祝うことに不都合ではないかという意見をもち女房たちもあつて、どうしようかと言われているところへ院

がおいでになつて、

「少しもさしつかえない。若君が女であれば母君の運命にあやかつてはならないとも考慮すべきだが」

とお言いになり、南向きの座敷に若君の小さい席を設けて祝膳ぜんが供えられた。新しい乳母めのとたちは皆はなやかな服装をしていて、お膳部から女房たちのためのお料理の盛られた器まで皆きれいな感じのする式場であつた。真相を知らぬ人々の寄贈したおびたしい祝品のあるのを御覧になつても、この誤りを正しくしがたい心苦しきから恥ずかしくばかりおなりになる院であつた。尼宮も起きておいでになつた。切りそろえられた髪かみの尖とぎが厚くいっぱいにひろ拡がるのを苦しくお思いになり、額の毛などを後ろへなでつけ

ておいでになる時に、院は几帳きちょうを横へ寄せてそこへおすわりになると、宮は羞はじて横のほうへお向きになったが、以前よりもいっそう小柄にお見えになって、髪は授戒の日にお扱あいた僧が惜しんで長く残すようにして切ったのであるから、ちよつと見ては普通の方のように思われた。次々に濃にくした鈍にびの幾枚かをお重ねになった下には黄味を含んだ淡色うすの単衣ひとえをお着きになつて、まだ尼姿になりきつてはお見えにならず、美しい子供のよような気がしてこれが最もよくお似合いになる姿であるとも艶えんに見えた。

「墨染めという色は少し困りますね。どうしても悲しい色でね、目がくらむ気がします。こうおなりになつてもいつしよに暮らすことができるのだからと思つて、みずから慰めようとしています

が、まだ今でも涙だけはあきらめにくれずに流れ出すので困りま
すよ。こんなふうにあなたに捨てられたのも、私自身の罪である
と考えられることも苦痛のきわみですよ。取り返せないものだろ
うか」

と院は御歎息たんそくをあそばして、

「ほんとうの尼の気持ちになつておしまいになれば、それは病氣
のためでなく、私がいやにおなりになつたためにそうおなりにな
つた気もして、私は情けないでしょうよ。やはり私を愛してくだ
さい」

こうお言いになると、

「この境地にいては人を愛したりすることができないものだ」と聞

いていますもの、まして私などは初めから愛するということがわからなかつたのですから、どうお返事を申し上げればいいか存じません」

と宮はお返辞をあそばされる。

「しかたのない方ですね、おわかりになることもあるでしょうが」と言いさしたまま院は言葉をお切りになつて、若君を見ようとあそばされた。乳母めのとには貴族の出の人ばかりが何人も選ばれて付いていた。その人たちを呼び出して、若君の取り扱いについての注意をお与えに院はなるのであつた。

「かわいそうに未来の少ない老いた父を持つて、おくればせに大きくなつてゆこうとするのだね」

と言つて、お抱き取りになると、若君は快い笑みをお見せした。よく肥ふとつて色が白い。大将の幼児時代に思い比べてごらんになつても似ていない。女御によごの宮方は皆父帝のほうによく似ておいでになつて、王者らしい相そう貌ぼうの氣高けだかいところはあるが、ことさらお美しいといふこともないのに、この若君は貴族らしい上品なところろに愛あい嬌きようも添そつていて、目つきが美しくよく笑うのを御覽ごらんになりながら院は愛情を感じになつた。思ひなしか知らぬが故衛えもんもののかみ門督もんとくによく似ていた。これほどの幼児でいてすでに貴公子らしいいりつぱな眼眸めつきをして艶えんな感じを持つていることも普通の子供に違つているのである。母の宮はそうであるとも確かにはわかつておいでにならなかつたし、その他の人はもとより氣のつかぬこと

であつたから、ただ院お一人の心の中だけで、哀れな因縁である
 と故人のことを考えておいでになると、人生の無常さも次々に思
 われて涙のほろほろとこぼれるのを、今日は祝いの式ではないか
 と恥じてお隠しになり『五十八翁をうまさのちありしづかにおもふによろこびに方有後静思堪』
たへたりまたなげくにたへたり

喜 亦 堪 嗟』とお歌いになつた。五十八から十を引い

たお年なのであるが、もう晩年になつた気があそばされて白樂天
 のその詩の続きの『慎つつしみてぐわんぐなんちのちちになるなかれ勿 頑 愚 似 汝 爺』を歌いたく

思召したかもしれない。あの秘密にあずかつた者がここの女房の
 中にいるはずである。その人たちは自分を愚人として侮蔑ぶべつしてい
 るのであろうとお思われになることは不快であつたが、自分のこ
 とは忍んでもよいが、宮をその人たちはどう思っているかという

点までを思うと、宮のためにおかわいそうであるなどと院はお思
いになって、あくまでも知らぬ顔を続けておいでになるのであつ
た。無邪気にうれしそうな声をたてる若君の目つき、口つきは知
らぬ人にわからぬことであろうが、自分が見れば全くよく似てい
るとお思ひになる院は、親たちが子供でもあればよかつたと言つ
て悲しんでいるのに、これを見せてやることもできず、秘密な所
にこの子だけを形見に残して、あの思ひ上がった男が、自身の心
から命を縮めて死んだかと衛門督が哀れにお思われになって、失
敬なことであると罪を憎んでおいでになつた感情も消え、泣かれ
ておしまいになるのであつた。女房たちがいつの間にかお居間を
出てしまったのを御覧になつてから、院は宮の近くへお寄りにな

って、

「この人を何と思うのですか、こんなにかわいい人を置いて、この世をよくも捨てられましたね。冷酷ですよ」

と不意にお言いかけになった。宮は顔を赤めておいでになった。

「たが世にか種は蒔まきしと人間はばいかが岩根の松は答へん

かわいそうですよ」

ともそつとお言いになったが、宮はお返辞もあそばさずにひれ伏しておしまいになった。もつともであるとお思いになって、しいてものお言わせしようともあそばされない。どんなお気持ち

でおられるのであろう、奥深い感情などは持つておられぬが、虚心平気でおいではなれないはずである。と想像ができるのも心苦しいことであつた。

大將は衛門督えもんのかみが思い余つて自分に洩もらしたことはどんな訳のあることであらう。故人があれほどまで弱つていない時であつたなら、自身から言い出したことなのであるから、もう少し核心に触れたことも聞き出せたであらうが、もうあの際であつたのがおりを得ないことで残念であつたなどと考えていて、兄弟たち以上にこの人は故人を恋しがつていた。女三の宮がにわかに出家を遂げられたことも何か訳のあることらしい、そう大病でもおありにならなかつた方を、院が何の抗議もあそばされずに尼にさせてお

しまいになってよいはずはないのである。二条の院の夫人があの重態になっていられた場合に、泣く泣く許しを乞こわれたのさえもお拒みになったのであるからというようなことも大將は考えられ、衛門督の問題と女三の宮の御出家とは関連したことに違いないということに思いは帰着した。昔から宮をお思いして、忍び余るような物思いの影を自分などに見せたこともある人である、自制うわべして表面だけはあくまでも冷静で、この人の心には何を思っているのかとうかがうのに苦しむほどであったが、感情に負けるところがあつて、あまりに彼は弱い男であつた、どんなにすぐれた恋人であつても、許されない恋に狂熱を傾け、最後に身をあやまるようなことをしてはならないのである、一方の人のために

も氣の毒なことであるし、彼が自身の命をそれに捨てたのも賢明なことではない、皆前生の因縁とはいいながらも、やはり軽率なことであつたと、大將は自身一人で思つていて夫人にも話さなかつた。またよい機会もなくて院に故人の心をお伝えすることもまだ果たさなかつた。大將としてはまたそれを話し出した時に秘密の全貌ぜんぼうの見られることも願つていたのであるから好機は容易に見いだせないのであるらしい。

故大納言の父母は涙の晴れ間もないほど悲しみにおぼれて暮らしているのであつて、日のたつ数もわからなかつた。法事などの用意も子息たちや婿君たちの手でするばかりであつた。供養する経巻や仏像も二男の左大弁が主になつて作らせていた。七日七日

の誦經ずきようの日は次々来るたびに、その注意を子息たちがすると、

「もういつさい何も聞かせないようにしてくれ。あれに關した話を聴きけばまた悲しみが湧わくばかりだから、かえってあれの行く道を妨さげることになる」

と言うだけで、大臣も死んだ人のようになっていた。

一条の宮はまして終わりの病床に見ることもおできにならないままで良人おっとを死なせておしまいになったというお悲しみもあつて、その後の日の重なるにつけて広いお邸やしきはますます寂しいものになつて、お召使いの人たちも減つていくばかりであつた。大納言の恩顧を受けていた人たちだけは、故人の未亡人の宮に今も敬意を表しに来ることを忘れなかつた。愛していた鷹狩たかりの鷹とか、馬

とかを預かっていた侍たちはたよる所を失ったように力を落としてながらも寂しい姿で出仕しているのがお目にはいつたりすることなども宮のお心を悲しくさせた。手馴ならしていた居間の道具類、始終弾ひいていた琵琶びわ、和琴わこんなどの、今は絃いとの張られていないものなども御覧になるのが苦しかった。庭の木立ちがけむり、時を忘れずに花の咲こうとするのをおながめになっていて寂しかった。女房たちも皆喪服姿になっていて、あらゆるものから受ける印象が物哀れであったある日の昼ごろに、高い前駆の声がしてお邸やしきの門にとまった車があった。

「ぼんやりしていますとお亡なくなりになった殿様がおいでになったのかと思いますよ」

と言つて泣く女房もあつた。それは左大将が訪問して来たのであつた。まず訪問の意を通じて来た。いつものように大納言の弟の左大弁とか、参議とかの来訪したのかと邸の人は思つていた所へ、品がよくてきれいな風ふうさい采さいで身の取りなしのすぐれてりつぱな大将がはいつて来たのであつた。中央の間にま続いた南向きの座敷に席を作つて客は迎えられた。普通の人たちのように女房だけが出て応接をするのは失礼であるといつて、宮の母君の御息所みやすどころが逢つた。

「あの不幸な友人を悲しみます心は身内の人たち以上ですが、形式的にはそれだけの志も見せられないのでございました。臨終のころ私へ託しましたことありますから、宮様に対して十分の好

意を私はお持ちしております。だれにも死はめぐつてくるはずですが、しばらくでもあとへ残りました以上は友人の縁故でできま
すだけのお世話を申し上げたいと思ひまして、もう少し早く伺う
つもりだったのですが神事などで御所の中の忙しいころに触穢しよくえ
のはばかりに引きこもらなければならなりませんのいかがと
遠慮がいたされましたし、またお庭へ立たせていただくような伺
いは私の心も満足できることでないと思ひまして、つい日をた
たせてしまったのでございます。大臣などのお歎なげきの深いのを聞
いておりますが、親子の愛情とは別な御夫婦の間でいらつしやつ
た宮様を、故人があんなに気がかりに考えておりましたことを思
いますと、宮様のほうでもお悲しみになつていらつしやる程度も

どれほどのことかと恐察されまして御同情に堪えません」

こう語っているうちにも大将はたびたび流れる涙をふいていた。清明な気高けだかさがあつて、しかも美しく艶えんな姿を大将は持っていた。御息所も鼻声になつて、

「悲しいのが無常の世の常と存じまして、悲しいことはまだほかにもいろいろあるのを思ひまして、私たち年のいった者はしいて気を強く持とうと努めることもいたしますが、宮様はまだお若いのでございますから、悲しみに沈みきつておしまいになりました、同じ世界へ行つておしまいになるのではないかと危険でなりません。おほどのお歎きをしておいでになります。不幸な生まれの私が今まで生きておりまして、大納言をお死なせしたり、宮様を未亡人

におさせしたりしていく運命をじつとそばでながめていねばならぬかと苦しゅうございます。近い御親しんせき戚関係でいらつしやいますから、もうお聞き及びでもございませうが、私はこの御結婚談の最初から御賛成は申し上げていなかったのでございますが、大臣が熱心に御運動をなさいましたし、また法皇様もお許しになる様子でございましたから、それではそのほうがよろしいことで、私の考え方は間違っていたのかと考え直しまして、とうとう御結婚をおさせ申したのでございますが、こんな夢のような不幸が起こつてくるのでございましたら、もつと自分の信じましたところを強く主張しておれば、宮様をこうした目におあわせせずに済んだはずであると残念でなりません。私は初めから宮様がたはよく

よくの御因縁のあることでなければ結婚などはあそばしてはならないものである、神聖なものとしてお置き申し上げたいと昔風な心に願っていたのでございますから、こんなどちらつかずの御不幸なお身の上におなりあそばした以上は、いつそ悲しみでお亡なくなりになるのもよろしかろう、不幸な宮様としてお残りになるよりはなどとも思いますが、さてそうもあきらめきれぬものではございませぬから、やはり悲しんでばかりおりましたうちにも、御親切な御慰問のお手紙を始終おいただきになるようでございますから、ありがたいことと存じておりまして、こうしていただけるのも故人が特に宮様のことでお頼みされたことがあったのかと、必ずしも御愛情の見える御良人ごりようじんではなかつたのですが、最後に

どなたへも宮様についての遺言をなさいましたことで、悲しみにもまた慰めというもののあるのを発見いたしましたのでございます」と言つて、みやすどころ御息所はひどく泣き入る様子であつた。大将もそぞろに誘われて泣いた。

「昔は不思議な冷静な人でしたが、短命で亡くなるせいか、この二、三年は非常にめいつて見える時が多くて、心細いふうを見せられましたから、あまりに人生を考えた末に悟つてしまつた清澄な心境というものかもしれないが、それでは今までに持つていたすぐれたよさが消えてしまうことにならないかとも不安に思われると、小賢しく私が時々忠告らしいことをしますと、あの人は私をあわれ憐むような表情で見ていました。何よりも宮様のお悲しみになつ

ていらつしやいます御様子を伺いまして、もつたいないことですが、おいたわしく存じ上げます」

などとなつかしいふうに話して、しばらくして大将は去つて行くこうとした。衛門督えもんのかみはこの人より五つ六つの年長であつたが、

彼はきわめて若々しく見えて、女性的な柔らかさの見える人であつたが、これは重々しく端正で、しかも顔だけはあくまでも美しいのを、若女房などは悲しさも少し紛れたように興奮して、歸つて行くこうとする大将の姿にながめ入つた。前の庭の桜の美しいのをながめて、「深草の野べの桜し心あらば今年ばかりは墨染めに咲け」と口へ出てくる大将であつたが、尼姿を言うようなことはここで言うべきでないと遠慮がされて、「春ごとに花の盛りはあ

りなめど逢^あひ見んことは命なりける」と歌つて、

時しあれば変はらぬ色に匂^{にほ}ひけり片枝折^{かたえ}れたる宿の桜も

と自然なふうに口ずさんで、花の下に立ちどまっていると、御息所はすぐに、

この春は柳の芽にぞ玉は貫^ぬく咲き散る花の行くへ知らねば

という返しを書いてきた。高い才識の見えるほどの人ではないが、前には才女と言われた更衣^{こうい}であったのを思つて、評判どおり

に氣のきいた人であると大將は思った。

大將はそれから太政大臣家を訪問したが、子息たちの幾人かが出て、こちらへと案内をしたので、大臣の離れ座敷のほうへ行つては無遠慮でないかと躊躇ちゆうちよをしながらはいつて行つて舅しゆうとに逢つた。いつまでも端麗な大臣の顔も非常に瘦やせ細つてしまつて、髭ひげなども剃そらせないで伸びて、親を失つた時に比べて子を死なせたあとの大臣は衰え方がひどいと世間で言われるとおりに見えた。顔を見た瞬間から悲しくなつて流れ出した涙がいつまでも流れてくるのを恥たずずかしく思つて大將は押し隠しながら、一条の宮をお訪ねして来た話などをした。初めからしめつぽいふうであつた大臣はさらに多くの涙を見せて、故人の話を婿とし合つた。

懐紙ふところがみへ一条の御息所が書いて渡した歌を大将が見せようとす
ると、

「目もよく見えないが」

と涙の目をしばたたきながらそれを読もうとした。見栄みえも思わ
ず目のためにしかめている顔は、平生の誇りに輝いた時の面影を
失つて見苦しかった。歌は平凡なものであつたが、「玉は貫ぬく」

ということばは大臣自身にも痛切に感じていることであつたから、
相憐あわれむ涙が流れ出るふうで、すぐにまた言うのであつた。

「あなたのお母さんが亡なくなられた時に、私はこれほど悲しいこ
とはないと思つたが、女の人は世間と交渉を持つことが少ないた
めに、不意にいろんな言葉が自分の痛い傷にさわるといふような

こともなくて、今度のような苦しみをそのあとで感じることはなかつたものです。賢くもありませんでしたが、朝廷の御恩を受けて地位を得てゆくにしましたが、彼の庇護を受けようとするものが次第に多くなっていたのですから、彼の死に失望をした者もずいぶんあるでしょう。しかし親である私は、そんなふうには勢力を得ていたのに惜しいとか、官位がどうなっていたかというようなことではなくて、平凡な息子むすこである裸の彼が堪えがたく恋しいのです。どんなことが私のこの悲しみを慰めるようになるのでしょうか。それはありうることは思われません」

大臣は空間に向いて歎息たんそくをした。夕方の雲が鈍色にびにかすんで、桜の散ったあとの梢こずえにもこの時はじめて大臣は気づいたくらいで

ある。

御息所の歌の紙へ、

このもとの雪に濡れつつ逆まに霞の衣着たる春かな

と書いた。大将も、

亡き人も思はざりけん打ち捨てて夕べの霞君着たれとは

と書く。左大弁も、

恨めしや霞の衣たれ着よと春よりさきに花の散りけん

と書いた。

大納言の法事は非常に盛んなものであつた。左大将夫人が兄のためにささげ物をしたのはいうまでもないが、大将自身も真心のこもつたささげ物をしたし、誦^{ずきよう}經の寄付などにも並み並みならぬ友情を示した。

左大将は一条の宮へ始終見舞いを言い送つていた。四月の初夏の空はどことなくさわやかで、あらゆる木立ちが一色の緑をつくつてゐるのも、寂しい家ではすべて心細いことに見られて、宮の御^{おんぼし}母子が悲しい退屈を覚えておいでになるころにまた左大将が来

訪した。植え込みの草などもすでに青く伸びて、敷き砂の間々には強い蓬よもぎが広がりがえっていた。林泉に対する趣味を大納言は持つていて、美しくさせていたものであるが、そうした植え込みのかんぼく灌木類や花草の類もがさつに枝を伸ばすばかりになって、一むら薄すすきはその蔭かげに鳴く秋の虫の音ねが今から想像されるほどはびこつて見えるのも、大将の目には物哀れでしめつぽい気分がまず味わわれた。喪の家として御簾みすに代えて伊予簾いよすが掛け渡され夏のに代えられたのも鈍色にびの几帳きちょうがそれに透いて見えるのが目には涼しかった。姿のよいきれいな童女などの濃い鈍色の汗衫かざみの端とか、後ろ向きの頭とかが少しずつ見えるのは感じよく思われたが、何にもせよ鈍色というものは人をはっとさせる色であると思われた。

今日は宮のお座敷の縁側にすわろうとしたので敷き物が内から出された。例の話し相手をする御息所みやすどころに出てくれと女房たちは勧めているのであったが、このころは身体からだが悪くて今日も寝ていた。御息所の出て来るまで、何かと女房が挨拶あいさつをしている時に、人間の思いとは関係のないふうに快く青々とした庭の木立ちに大將はながめ入っていたが、気持ちには悲しかった。柏かしわの木と楓かえでが若々しい色をして枝を差しかわして立っているのを指さして、大將は女房に、

「どんな因縁のある木どうでしょう。枝が交じり合って信頼をしきっているようなのがいい」

などと言い、さらに簾みすのほうへ寄って、

「ことならばならしの枝にならさなん葉守はもりの神の許しありきと

まだ御簾みすの隔てをお除きくださらないのが遺憾です」

と言つた。一段高くなつた室へやの長押なげしへ外から寄りかかっているのである。

「柔らかい形をしていらつしやる時に、また別な美しさがおありになりますよ」

と女房らはささやき合うのであつた。今まで話していた少将という女房を取り次ぎにして宮はお返辞をおさせになつた。

「柏木に葉守の神は坐すとも人馴らすべき宿の梢かこずゑ

突然にそうしたお恨みをお言いかけになりますこと御好意が疑われます」

と伝えられたお言葉に道理があると思つて大将は微笑した。その時に御息所がいぎつて来る気配けはいがしたので大将は少しいずまいを直した。

「世の中のことをあまりに悲しく思い過ぐしますせいですか、身か体のぐあいからだが悪うございまして、ぼけたようにもなつて暮らしておりますが、こうしてたびたびの御親切な御訪問に力づけられまして出てまいりました」

と御息所は言ったが、言葉どおりに病氣らしく感じられた。

「故人をお悲しみになりますことはごもつとも至極なことですが、しかしそんなにまで深くお歎なげきになつてはよろしくないでしょう。この世のことはみな前生からのきまつている因縁の現われですから、そう思えばさすがに際限もなく悲しみばかりの続くものでないことがわかれると思ひますが」

などと大将は慰めていた。この宮は以前うわさ噂に聞いていたよりも優美な女性らしいが、お気の毒にも良人おととにお別れになつた悲しみのほかに、世間から不幸な人におなりになつたことを憐あわれまれるのを苦しく思つておいでになるのであるうと思ふ同情の念がいつかその方を恋しく思ふ心になつてゆくのをみずから認めるよう

になった大將は熱心に宮の御近状などを御息所に尋ねていた。御容貌きりようはそうよくはおありでならないであろうが、醜くて気の毒な気持ちのする程度でさえなければ、外見だけのことでその人がいやになるようなことがあったり、ほかの人に心を移すようなことは自分にできるはずがない、そんな恥知らずなことは自分の趣味でない、性格のよしあしで尊重すべき女と、そうでない女は別わけらるべきであるなどと思っていた。

「もうお心安くなったのですから、衛門えもんのかみ督をお取り扱いになりましたごとく、私を他人らしくなく御待遇くださいますように」

などと、恋を現わして言うのではないが、持ってほしい好意をねんごろに要求する大將であった。その直衣姿のうしは清楚せいそで、背が高

くりつぱに見えた。

「六条院様はなつかしく艶えんな美貌びぼうで、そしてお品のよい愛あい嬌きょうが無類なのですよ。この方は男らしくはなやかで、ああきれいだと思う第一印象がだれよりもすぐれておいでになりますよ」

などと女房たちは言つて、

「かなうことなら宮様の殿様におなりになつて始終おいでくださることになればいい」

こんなことまでも思ったに違いない。「右將軍が墓に草はじめて青し」と大將は口ずさみながらも、この詩も近いごろ逝いつた人を悼いたんだ詩であることから、詩の中の右將軍の惜しまれたと同じように、世人が上下こそぞつて惜しんだ幾月か前の友人の死を思うの

であつた。みかど帝も音楽の遊びを催される時などには、いつの場合にもえもんのかみ衛門督を御追憶あそばすのであつた。「ああ衛門督が」という言葉を何につけても言わない人はないのである。六条院はまして故人をおあわ憐れみになることが月日に添えてまさつていった。宮の若君を院のお心だけでは衛門督の形見と見ておいでになるのであるが、だれも、この形見のあるのは知らぬことであつたから、何ものからも面影をとらえることは不可能だと思つて衛門督を悲しんでいるのであつた。秋になつたころからこの若君はは這いなどなざる様子が言いようもないくらいかわいいので、院は人前ばかりでなく、しんからいとしくて、いつも抱いて大事になさるのであつた。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：鈴木厚司

2004年2月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

柏木

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>